

石鹼つけたら変わった！ 八幡保育園（福井県福井市）

【5歳児】

子どもの発見を見つけ、ヒントにして保育を進めていくことを「科学する心」を育てることと考える。今年度は、その中から、「梅干し作り」を取り上げ、「梅って緑色」「なんで梅干しは赤いの？」「すっぱいね」から掘り下げて考えていくことにした。

梅干し作りの流れ

梅のへたをつまようじで丁寧にとる。

(ジャンケンに勝った子どもが得意げに)梅を洗う。

みんなの梅を集め、観察する。同じ梅でも色、形が違うことを発見する。

梅を「かめ」に入れ、重石を置く。

梅は清潔にしておかないと「きらわれる」という伝説を知る。

地元の「木田ちそ」を丁寧に洗う。

翌日の「カメ入れ」に期待を寄せて、ザルに干す。

紫蘇もみをする。葉の色と同じ色の汁が出ることを発見する。指紋の中に赤い汁が入り込むことに気付き、見る。

黄色い透明の汁が紫蘇を入れた瞬間、赤くなっていくのを見る。

<子どもの気付き・言葉：斜体>

「へたって、おへそみたいや」

「硬いし、なんかへんなにおい」

「梅が重いって、言ってるわ」「すぐにできるんかと思ってた」

「優しくせんと、やぶれるよ」

「わあ、すごい。梅干が進化した」

事例：手の色がかわった

自分の思いを個々に発する。

「せんせい、手に色がついた」「みんな、すごいよ。紫蘇のパワー」

「私、手につくのいやだ」「絵の具みたいや」「お絵かきしてみたい」

保育者の手の動きを真剣に見る。

順番にすることにこだわる子とそうでない子、早くやりたい子と後でいい子と

様々な思いをもっている。見たことは、言葉に表出しやすいが、こうしたい、

こう思うは、なかなか言えない。

「石鹼をつけたら、色が変わった。」というK児の発言に大きく反応し、自分でも

試してみたい姿がある。前にしてしまった子は、他の様子を見ている。



<子どものコメント>

「手についた」

「なんで、なんで？」

「手についてとれなかったら、どうする？」

「赤い汁でお絵かきしたらどうなる？かけるのかな？」

「石鹼つけたら、かわった」

「石鹼は、まほうか？」

「わたしもしてみよう」「ぼく、もう、してもた残念」

なぜ、石鹼をつけたら変わったのかな？

みんなで考える。分からない。

<保育者の思い>

一人の子の発見がみんなに浸透し、「なんで？ どうやってした？」「やってみよう」と子ども同士で、伝達、興味、関心、行動と発展していった。

保育者に自分の行動をゆだねたり、他とのトラブルの解決策を求めたりすることがなく、子どもの生き生きとしたたくましい姿、表情に「自分から」「自分が」という主体性が意欲、充実感につながることを感じた。

事例：不思議なことがあるもんだ

梅干の汁・石鹼水の他に水・ジュース・酒・醤油・油など“いろいろな水”と

リトマス試験紙を使って、紙の色が変わる「不思議」を感じる遊びをする。



梅干し作りのその後の流れ

梅を干す。朝早く干すことを伝えると気にかけて早く登園して干す。再びカメに入れる。

干した紫蘇を揉む。すりばち、すりこぎでする。

梅干おにぎりを作り食べる。「大きい作るぞ」「嫌いいやけど今日は食べる」「海苔が足りなくなった。僕のあげるわ」

みどころ

梅干し作りの数々の作業を行い、紫蘇の色が出てきたことで「梅干らしい色だ」と感じて「梅干ができる」という期待につながりました。そのため「色が付いた」「色は落ちる？」などいろいろな思いで染まった手を見た子どもたちが、石鹼で色が落ちたことは、とても不思議な「科学する心」が育まれる体験になっています。

このように大きく心を動かすことで、「梅干を作ること、梅干になることはすごいことだ！」という印象的な体験となり、意欲や満足感に結びつきます。